

高校中退者の家族形成

神奈川県立田奈高等学校教諭 吉田美穂

Findings

- ① 妊娠が契機となる女性の中退には、大きく2つのタイプが存在する。妊娠がなければ高校生活を継続したであろうと考えられるタイプと、高校生活に不適応を起こしている状況の中で、妊娠が中退に向けての最後の決断をもたらしたと思われるタイプである。後者の場合、妊娠によって、家族に対しても世間一般に対しても学業の中断を説明しやすくなった女性が、様々な葛藤を抱えた高校生活から逃れるために、人生の転換点として妊娠を肯定的にとらえ、中退を選択していく。
- ② 妊娠・出産したケースはいずれも結婚より妊娠が先行しており、妊娠を契機に結婚や同居へと進んでいく。ただし、妊娠後すぐに入籍やパートナーとの同居が始まるケースは少なかった。高校在学中の妊娠は、パートナーも経済的に自立していない場合が多く、実家で生活するなど、日常的な家事・育児をはじめ衣食住においてそれぞれの実家という資源が非常に重要な役割を果たしている。
- ③ 妊娠・出産を経た女性から高校への復帰や学習支援・資格取得支援を求める声があり、高校中退前後に丁寧な情報提供と相談が必要である。また、出産後は、子育てや家庭の悩みを共有できる人間関係が重要になっている。行政に対する要望としては、家族形成を支える公営住宅、子ども手当等の子育て支援の充実、及び行政が提供するサービスについての丁寧な周知などが挙げられている。
- ④ 家族形成に踏み出す前の高校中退者の意識を見ると、性別役割分業にもとづくジェンダー規範が男性・女性とも内面化されており、妊娠など結婚を促進する要因がない場合、経済的な不安定さや余裕のなさから、特に男性において非婚の状態が継続される可能性が高い。一方、妊娠を契機として、経済的に家族形成の準備が整わないままに、家族形成を始めざるをえないケースも一定数生じるものと考えられる。

1 新しい家族の形成につながる語り—高校中退者の意識と行動

本稿では、調査対象者が、実際に新しい家族形成に踏み出しているケースを中心に、高校中退者の家族形成につながる特定の異性との関係・妊娠・出産・同棲・結婚などに関わる意識と行動を分析し、求められる支援について検討する。

平成23年3月公表の調査票調査（回答者数1,176人）においては、婚姻状況について「結婚している」3.9%、「同棲している」2.6%となっており、高校中退者のうち、少なくとも6.5%が中退後概ね2年程度で新しい家族を形成していることが明らかになっている¹。ここでは、今回の面接調査の分析を通して、新しい家族形成段階に入っている高校中退者の状況を明らかにし、求められる支援について考察する。また、実際に家族を形成していない者についても、今回の面接調査から、高校中退者の家族形成に向けた課題について若干の考察を行う。

特定の異性（「彼」「彼女」）との関係や妊娠・出産・同棲・結婚などに関わる語りは、全41ケース

¹ 既に妊娠・出産などを経ている、入籍や同棲をせず実家にいるケースなどは、この6.5%に含まれていない。上記のようなケースがあることは、今回の面接調査からも明らかである。

(男性 20 ケース、女性 21 ケース)のうち 18 ケース(男性 9 ケース、女性 9 ケース)に見ることができる。調査対象者が 16 歳～21 歳であり、今回の面接調査の中心的なテーマが高校中退とその後のキャリア、現在の状況や将来の展望、求められる支援であることを考えれば、家族形成につながる語りを含まないケースが過半数を占めることは当然であろう。

例えば、医師や公務員、芸能人など自らの具体的な職業を思い描きその実現に向けた過程を歩んでいる場合は、新しい家族形成につながる語りは全く出てきていない。一方で、「将来の夢とかはないです。特にあんまり考えてないですね、今は。」「今必要なのはお金。お金があったら、とりあえず他の県行ってどっか旅します。暖かいところがいいです。沖縄で家賃払ってアパート住んでみたいな。ここにいてもつまらないですよ。親もうざいし。抜け出す方法は今はまだないですね。とりあえず金を貯めてふとどっかへ消えてみたいな。」というように自らについて具体的な将来像が全く描けていないケース(17 歳・男性など)においても、新しい家族形成に関わる語りはみられない。

特定の異性(「彼」「彼女」との関係や妊娠・出産・同棲・結婚に関わる語りが含まれる 18 ケースには、既に新しい家族形成に踏み出している 5 ケース(男性 1、女性 4)が含まれている。以下の分析においては、2 においてこの 5 ケースを中心に、既に家族形成に踏み出している高校中退者の実情と求められる支援を詳細に検討・考察し、3 で、それ以外のケースから、これから家族形成に向かうであろう高校中退者の抱える課題について若干の考察を行う。

2 新しい家族形成に踏み出している高校中退者の実情と求められる支援

この項では、すでに新しい家族形成に踏み出しているケースをみていく。該当するのは、女性 4 ケースと男性 1 ケースで、年齢は 17 歳～19 歳である。このうち、同棲しているが子どもがいない 1 ケースを除く 4 ケースは、本人又はパートナーが中退前後に妊娠・出産を経験し、乳幼児を養育している状態にある。

(1) 高校中退と妊娠・出産

妊娠・出産を経て乳幼児を養育している 4 ケースにおける、高校中退と妊娠・出産の関係をみてみたい。

語りから、中退後に妊娠・出産した 1 ケースを除く 3 ケースで、本人又はパートナーの妊娠を契機として高校中退が選択されていることがわかる。しかし語りを詳細に検討すると、その経緯には質的な違いがみられる。

中退したのは、3 年生の学祭終わった後にこの子出来ているのが分かって。3 年生はちゃんと終わろうと思ったけど、インフルエンザ流行って、妊娠は学校のほうではいいって言われたけど。学祭終わって夏休み期間があって、夏休み終わった後にあんまり行ってなかったんですね。で、電話きて単位危ないよって言われて、こうなんだけど、でも学校は続けたいんだと話したんですけど、やっぱりだめだねって言われて。9 月の終わりに退学しました。(1)

朝、起きるのがしんどいからですよ。朝 7 時には起きていないと遅刻という感じ。本格的に朝がダメなんで。秋から冬ぐらいから。面倒くさくなったのと、友達関係のゴタゴタで。10 月後半ごろにいろいろ重なって、ちょうどいい機会だろうと思って。「ここから遠いし、どうせ起きられないし、留年するし」って。勉強が理由ではないですね。勉強しないでテストを受けても、平均点は取れてました。(中略) 通うのが辛くなった後に妊娠していることが分かった。辞めてからは、「やっと辞められる」

という解放感。(2)

何かの授業が後1日休むとアウトになって、その時は実家において、親に今日行かなければやばいんだけど休みたいって。それで辞めちゃうみたいな話になって。そのちょっと後に子どもができていってわかって。(3)

①のケースでは、本人は卒業に向けた強い思いを持っており、妊娠によって不本意な形で学校を去る決断をしている。それに対し、②は、妊娠以前から朝起きられないことや友人関係のトラブルによって学校を続けたくない気持ちが強くなっており、妊娠は、退学に向けて最後の決定打になったと考えられる。③の場合も、高校2年生になってほとんど学校に行かなくなって学業の継続が危ぶまれ、本人も辞める方向に流れていたところに、子どもができたことが辞める決断を後押しすることになった。

このように、妊娠が契機となる中退には、大きく2つのタイプがあると考えられる。妊娠がなければ高校生活を継続したであろうと考えられるタイプと、高校生活に不適應を起こしている状況において、妊娠が中退に向けての最後の決断をもたらすタイプである。中退率が高い高校における筆者自身の勤務経験からも、後者のタイプは少なくないと考えられる。妊娠を理由にすることによって、社会的にも家族に対しても、学業の中断を説明しやすくなることから、いろいろな課題を抱えた高校生活から逃れるために、人生の転換点として妊娠を肯定的にとらえ、退学を選択していくのである。

調査票調査では、「高校を辞めた理由」として4.0%の者が「妊娠した」を挙げている。データを女性に限れば6.8%である。この数値は、「欠席や欠時がたまって進級できそうもなかったから」という中退理由54.9%などに比べると一見小さく見える。しかし、「欠席や欠時がたまる」背景には様々な個別の事情が考えられ、この理由は複合的な性質を持っている。そのように考えると、妊娠という端的な事実が示している4.0%という数値は、決して小さなものではない。

いずれにしても、妊娠を契機として、彼らは学校という場を離れ、家族を形成する主体として、新しい社会・家族関係の中に身を置くことになる。

(2) 新しい家族形成に踏み出した者の現状

① 実家という資源の重要性

妊娠・出産を経験したケースについて現在の生活状況をみていくと、多くのケースで実家という資源が大きな力を発揮していた。妊娠・出産を経験した女性3ケースのうち、2ケースは、現在も自分あるいはパートナーの実家に同居している。残りの1ケースは、出産・入籍後も1年以上にわたって自分の実家で生活しており、現在も様々な支援を実家から受けている。

実家で暮らすつもりだったんだけど、そのお母さんがうちおいでって孫も可愛いし。それで今は行き来してます。地名Aと地名C。(中略)もう最近になって、ほとんど2週間位、歯医者さんあるときだけ地名Aに帰ってくるんですね、見ててくれる人いないからお母さんに預けて。だからたぶん2週間位は地名Cにいます。でこっちにも1週間位、また2週間向こうって感じです。(4)

④は、このように自分の実家とパートナーの実家を行ったり来たりして生活している。親との関係は、出産後「親の有難さが分かって」良好となり、出産に反対したパートナーの保護者も後には認め、孫を可愛がってくれて買い物や食事作りも一緒にする仲の良い状態になっている。病

院への通院などにも家族の支援がある。基本的な衣食住から精神的な支えにいたるまで、それぞれの実家の支援は大きいといえるだろう。

(自分は) 基本的には育児。親と同居しているので、親が家事をしている時に、余裕があれば手伝っています。週に1~2回、車がある時は親と一緒に外出します。基本的には買い物を中心。スーパーとか最寄り駅の方まで行って。(中略) ここ(実家)だと人数的にもキツイので、今月後半には引越したい。今は風呂の時間も順番待ちなので。あっち(夫)の家のほうに、引っ越すまではいる感じですね。いったんはあっちの親のほうに行って、そのあと公営が当たれば公営になるし。(5)

5も、自分の実家で同居しており、家事は実家の親が行っている。本人は親と買い物に行く以外、育児に従事している。実家の家族構成員が多いため、公営住宅への入居を希望しているが、その見通しが立つまでパートナーの実家に移り住む予定である。現状としては、住むところから家事に至るまで、自分又はパートナーの実家という資源に大きく依存している状態だといえよう。

このほか、6は、現在はパートナーと子どもの3人暮らしであるが、「昨年6月に出産、8月に結婚、12月から一緒に暮らし始めた。それまではそれぞれの親元に」と語っていることから、妊娠判明の時点からパートナーとの同居までに1年以上が経過している。その間は、自分の実家に同居して、支援を受けていた。さらに現在、通信制高校に通っているため、2週に4日程度のスクーリングの際には、実家に預かってもらっており、実家からは出たものの、その支援は継続している。

これらのケースから、実家という資源の重要性は明らかである。高校在学中の妊娠は、パートナーとなる男性も経済的に自立していないケースが多いため、出産・育児時期において、日常の衣食住のレベルも含めてそれぞれの実家という資源が非常に重要であり、その後の生活を支えているのである。

とはいえ、語りの詳細は割愛するが、妊娠が判明した当初は、いずれの実家もその事実を歓迎したわけではなく、時間の経過とともに受け入れられるようになったと見られる。他の資源が乏しいため、結果的には、最低限の衣食住レベルを含め、実家が重要な資源とならざるを得ないといえよう。

逆にいえば、実家という資源が得られない場合、若年での出産・育児に直面する高校中退女性の生活は極めて厳しい状況になると想定される。

② 経済的自立・入籍・同居・妊娠・出産の順序と家族形成のリスク

新しい家族形成に踏み出している5つのケースをみると、男性の経済的自立⇒結婚(入籍)⇒同居⇒妊娠・出産という、高度成長期に形成された従来型の核家族形成のパターンからは外れているケースが多い。

上述したように、妊娠⇒出産⇒入籍⇒同居というパターンもあれば、妊娠⇒出産⇒実家同居・未入籍というパターンもある。同棲しているが未入籍、同棲⇒妊娠⇒入籍⇒出産などもある。そして、男性の経済的自立が達成されていないケースが多い。

年齢の低さや経済的な不安定さを背景に、従来の規範からいえば周囲の承認を得ることにつながる家族形成の象徴的な出来事は、ばらばらに配置されたり、抜け落ちたりしている。このことが、その後の家族形成に困難をもたらしたり、家族の養育機能に負の影響をもたらすことにつながる。

がる可能性がないとはいえない。

2005年の19歳以下女性の有配偶者に対する離婚率は69.65%（国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集2011年版」）と極めて高くなっている。今回の調査対象者で結婚している者については、いずれもパートナーとの関係は継続されている。しかし、今回の調査の対象者は、中退後概ね2～3年で、かつ、時間を要する面接調査に応ずることができた者に限られており、中退して家族形成に踏み出した者の中でも精神的・経済的に比較的余裕のある状況にあった可能性は否定できない。

高校中退者の家族形成については、中退後の年数がさらに経過したケースや実家の支援が受けられない厳しい状況にあるケースなども含めて、今後さらに調査される必要があるだろう。

③ 家族・実家以外の社会的なつながり

自ら形成した家族や実家以外に、どのような人間関係や社会的なつながりをもっているかをみると、女性と男性では状況が大きく異なっていた。

〔7〕（男性）は、複数の仕事を経験しているが、「中退した時も仕事を変える時も、いつもだいたい目星がついてました。現場現場で知り合いがいて、いろんな人が誘ってくれて」というように、必ずしも個人的に親しいわけではなくても、仕事を紹介してくれる社会的なつながりを持っており、そうした中で職業についての知識を広げている。中学校や高校時代の友だちは連絡先は知っているが、「子どもが生まれちゃってからは時間が合わない」のでたまにしか会うことはないという。

これに対し、育児を主に従事している女性について見ると、同世代で同じように子育てをしている友人の重要性についての語りが多い。

家族に相談して心配掛けたくないから、やっぱり友達かなって結局。いとこの友達なんですけど、その子も同じママ友同士で仲良くなった子に相談したりとかあります。〔8〕

（相談相手は）やはり自分の母とか、今日一緒に来てくれている友だちA。やっぱり普通に友だちと話していても、結婚したこともないし、家庭を持ったこともないし、彼氏とか彼女っていう関係じゃないので、そういうふう考えてるのとはまた違うので、話してもどうにでもなる訳でもないし。やっぱり同じふう結婚していたり子どもいたりする人と話す方が。（友人Aは）高校1年の時、高校の友だちの友だちで、地元も一緒だったので、仲良くなった。その後は途絶えていたが、SNSでつながっていて。お互い同じ時期に子どもが生まれるってなってまた仲良くなって。〔9〕

子育て中の女性の場合は、仕事中心の人間関係について語る男性とは異なり、結婚や子育ての経験を共有できる相談相手を求める傾向が強く、またその重要性がうかがわれる。

④ 公的サービスへの要望

家族形成の途上にある経済的に厳しい世帯であることを反映して、5ケース中2ケースで公営住宅にかかわる要望が出されている。

出産費用でいっぱい、一緒に住む費用もないし、とりあえず今は「公営住宅に応募して住めればいいな」と思っています。それが無理なら普通のアパートやマンションを借りて住む感じですかね。（中

略) 引越しをするとなるとお金がかかる。公営とか当たればいいけど、普通はもっと高いから、まずは住むところですかね。貯金をしなくちゃと思いますし。(10)

公営団地など、応募資格とか抽選とかわからない。生活補助なども年収いくらかから受けられるとか。一応今受けられるものはたぶん受けていると思うんですが。役所って向うから教えてくれないじゃないですか。全部自分で調べなきゃならない。役所の時間。職人は月曜から土曜働いてて日曜休みが基本ですけど、役所やってる時間は工作中じゃないですか。(11)

11の語りからは、役所の対応の曜日や時間、必要なサービスについての十分な周知についても、要望していることが読み取れる。

このほか、11は、自らの社会保険などについても認識するとともに「子ども手当をもうちょっとあげて」「確定申告の時に扶養控除がなくなることが気になる」などの具体的な社会への要望を語るなど、家族形成の時期に入り、社会のシステムに敏感になっている様子がうかがわれる。しかし、このような社会性の獲得は、全ての者に見られるわけではない。例えば、様々な社会保険などについて問われたのに対し「よくわからない。なんかそういうのお母さんたちが払ってくれているからよくわからない」と語っているケースもある。

学校の対応について要望を語っているのは12である。

休学のことでは、やっぱりまた何か入学するのって中学校に申し込んでそれでなんか面接しないとダメなことがちょっと面倒くさいなっていうのもあって、やっぱ休学っていうのが、大学とかでは子ども産んだら休学とかあるんですよね？だから高校でもそういうのがあればなって。産むのは早いけど。あればまた、通えたなってそれは思います。(12)

一般に、高校には休学制度は存在している。しかし、12のケースにおいては、結果的には、学校とのやり取りの中で、12自身はそのようには理解できていない。学校側の指導として、12のケースにおいて休学は望ましい選択ではないという方針があった可能性もあり、その妥当性についてはここで検討することはできない。重要なのは、制度の有無ではなく、妊娠・出産した生徒が学校の中でどのように置かれるのか、出産に向けた支援と並行して、何らかの形で学業生活を継続させる方向での支援がなされているのかという点であろう。学業生活を中断するとしても、その後同じ学校に戻るにはどうしたらいいのか、それとも通信制に転学するなどより望ましい方法がとれるのか、など、ケースに合わせた適切なアドバイスがなされる必要があるだろう。12は、高校3年次に中退しているので2年次までの単位を修得しているとみられ、別の高校に編入する場合も必要書類(単位取得証明書等)は中退した高校で発行されるが、本人は「中学校に申し込んで」と語っており、そうした手続き面も理解していないと思われる。「高校辞めても単位って残るし」と明確に語る11などと比べると、本人の理解不足も考えられるが、中退時の支援が十分でなかった可能性がある。

このほか、13が「資格を取るための経済的支援」「計算などに苦手意識があり、バイトの面接でも困ることがあるので学び直したい」「初対面の人と接することが苦手なのでコミュニケーションの取り方、人との関わり方について相談できるようなところがほしい」などの要望を出している。

⑤ 将来展望における家族の存在

家族形成に踏み出しているケースでは、将来に対する展望について語る場面でも、家族に関わる語りが多く含まれる。

とりあえず塗装業。塗装業である程度一人でできるようになるのは3年と言われているんです。20代前半でうまくいってれば独立して、子どもが生まれたり人より早く進んでいるんで、家も買っちゃおうと。ほかが雇われてやっているときに一人親方でやってたらいいいじゃないですか。塗装業は解体屋などと違ってそんなに道具もないし、早く独立できる。家族については、とりあえず食っていければ。(14)

今3人でこの子が5歳位まで仲良くやっていきたいなっていうのがあって、で一軒家も欲しいからこの子のために、だからパパも働いて、ママも働いて保育園（ママ※引用者注）に通って、でいい感じに行けば良いなって思います。なかなかうまくいかないですけどね。(15)

(通信制の) 学校はやっぱり早く卒業して、できるだけ一日この子と一緒にいて。ちっちゃい時の成長って早いので、そういうの见たいし、寂しい思いもさせたくないの。一日いなかった日の夜はぐずって寝なかったりとか、そういうところに出てくるので。(中略)(5年後は?) わかんないです。パートとか。卒業したらすぐにでもやりたいですけど。半日とか。(16)

進学や正規就労は考えておらず、結婚したいと考えている。彼氏とも結婚したいっていう話もしているが、現実的にはまだまだ先だと思っている。アルバイトをして貯金しつつ20代前半までにはしたいと考えている。それと料理が好きなので調理師の資格を取りたいと思っているが、やっぱり取りに行くのが大変なので最近では取らなくていいかなと思っている。(17)

今後は、とりあえず、保育園（ママ※引用者注）にも入れない状況なので。順番待ちで、まだ引越し先も分からないので、手続きもできない。(18)

これらの語りは、将来展望そのものはそれぞれに異なっているものの、家族についての語りが含まれること、男性は仕事、女性は家事育児を中心的に担いパートやアルバイトなどで補助的な働き方をするという性別役割分業の意識については、共通性を有している。

また、女性の場合、資格取得に言及するケースが4ケース中3ケースと多かった（野菜ソムリエ、調理師、医療事務）。ただし、それに向けて現時点で具体的な行動を起こしているわけではなく、「何か料理系のお仕事に就きたい」「料理が好きなので調理師の資格取りたいと思っているが、やっぱり取りに行くのが大変なので最近では取らなくていいかなと思っている」「(医療事務の資格は) 取りたいと思っているんですけど、うまくいっていかなくていいかなってわかんないですね」など、ややあいまいなものにとどまっている。満足できる仕事に入ることができるかどうかという不安が、資格取得の願望となって表れているといえるのかもしれない。

高校への復学については、現在通信制に通っている(16)を除くと、(15)のみが「もしも(家族が) 賛成してくれるならこの子が2, 3歳になってから本当は行きたいですね」と語っている。

⑥ 求められる支援

以上のような知見を踏まえて、求められる支援について述べておきたい。

第一に、妊娠と高校中退についてである。

○ 妊娠・出産しても学び続けられる環境の整備

妊娠を契機にした不本意な高校からの退場は、極力減らしていく必要がある。現在、妊娠した生徒に対し、自主的な退学を促す高校は少なくないと考えられる。学校の社会的な役割を考えると、若年での妊娠が貧困の再生産につながらないように、妊娠・出産しても学び続けられる環境をつくっていく必要がある。高校側の意識改革とともに、福祉機関と学校が連携を強め、こうした生徒を支えられるようにすべきであろう。そして、より根本的な取組として、望まない妊娠を減らすための中学校や高校における性教育が重要である。

中退して家族形成に踏み出した者に対しては、次のような支援が必要であろう。

○ 家族形成を支える居住環境の整備

子どもを抱えた低所得の若年世帯を対象とした、公営住宅の整備等が求められる。また、このような行政の提供するサービスについての丁寧な周知も重要である。

○ 支え合える人間関係形成の支援

子育てに中心的に従事する女性の交際範囲は限られている。「ママ友」が重要な存在になっていることから、支え合える人間関係を形成するための支援が必要であろう。特に実家の支援を受けられない女性などの場合には、必須である。

○ 中退後の子育て期間中の学習支援と中退時の十分な情報提供

基礎的な学習支援や資格取得支援は、乳幼児を抱えている母親にとっても重要である。中途退学時に、子育て中でも利用可能な教育制度についての情報が提供される必要がある。また、中途退学時までには修得した単位があれば、それを生かして学業を継続できることについても周知し、中断された学業の再開を支援していく必要がある（内閣府「社会生活を円滑に営む上で困難を有する子ども・若者への総合的な支援を社会全体で重層的に実施するために」（平成22年7月）参照）。

中退後、子育て・家族形成に主要な関心に移している女性たちは、他の中退者に比べ、アイデンティティの揺らぎは少ない状態にあるといえるかもしれない。本調査に見られたように、乳幼児の養育という点から実家の支援を得られる場合も少なくないだろう。しかし、こうした一時の安定した状態がいつまでも継続できるとは限らない。先にあげたように、19歳以下女性の有配偶者に対する離婚率は69.65%（2005年、国立社会保障・人口問題研究所）と極めて高い。離婚など一度形成した家族が瓦解した場合に、高校卒業資格を持たずに乳幼児を抱えた女性が生活基盤を築くには、多くの困難が予想される。そうした可能性も視野に入れた学習支援等が求められる。

3 これから家族形成に向かう高校中退者の抱える課題

この項では、まだ家族形成に至ってはいないが、特定の異性との関係や同棲・結婚などに触れた語りが含まれている13ケースを通して、高校中退者の家族形成にかかわる状況について検討する。

(1) 経済的背景と結婚

実際に家族形成にまで踏み出していないものの、現在の交際相手との結婚を具体的にイメージしているケースが、**19**と**20**である。

19は19歳の男性で、中退後半年の時点からすでに2年半職人として継続して働いている。

家から出て「結婚してもいいな」とか「結婚したらなんとかなるだろう」とかそういう気持ちはありますね。貯金は多分あいつ（彼女）はしてますね。それでいつも怒られます。将来のことについての話し合いはたまに。共働きは、しますね。「家でなんかしてる暇があるんだったら働け」と。家事とか子育てとかは手伝います。(19)

19の場合、2年半の職業生活を通して社会の中でそれなりに安定した足場を築いていることが、交際相手が望むなら家族形成に進んでもいいという気持ちにつながっていると考えられる。一方、「貯金はたぶんあいつはしてますね」という語りが結婚の話題に引き続いて出ていることから、結婚にはそれなりの資金準備が必要だという認識があると思われるが、19自身は、趣味のバイクでローンがあり、「実家は金がたまり次第出ていくかな」と別のところで語っているので、現時点では資金面の準備不足を意識しているとみられる。

高校時代の先輩からの紹介で、去年の夏くらいから交際している男性がいる。1こ上なんですけど、真面目に仕事してる人（正社員）で。私と生き方違ってちゃんと高校も卒業して、部活もちゃんとしてきた人で憧れはあって。その人に会って私も規則正しく生活しなきゃって思って、派遣だけど平日8時間勤務でとかって変わった。その人の影響力は凄かったですね、まじめに仕事行ってるから、朝私があるとかなくても、休むとか言いたくないわってなって仕事出たりするんで。唯一（自分を）変わらせてくれた人で、母親とかも納得はしてるんで、変わってくれたって。同棲や結婚の話も出てるんですけど、自分の中ではローンがでかいんで、まだ頑張ってるかなと。やっぱ結婚は22、23（歳）とか落ち着いてからしようとは思ってるんですけど。(20)

20は18歳の女性で、派遣で部品の検品などの仕事をしている。交際相手については憧れと自身への強い影響を語っているが、結婚の話が出ているにもかかわらず、ローンがあることから、先に延ばす姿勢を示している。19と同様、結婚に向けてそれなりの資金準備が必要という意識が働いているといえるだろう。

19、20は結婚を意識しつつも、いずれもローンや貯金不足という経済的な理由を中心にまだその時期ではないと考えている。

(2) 性別役割分業意識と家族形成

13のケースを通して、将来の家族形成をどのようにイメージしているのかをみると、男女とも、男性は仕事、女性は家事育児中心で働く場合も補助的なものという性別役割分業の意識が強いことが複数の語りから伺われる。女性の語りには、次のようなものがある。

高校なんか行かなくてもいいと思ってるし。生きてく中でいらないだろうから。男とかなったら大事かもしれないけど、女だったら最終的に養ってもらえばいいだけだから。(女性 20歳 専門学校) (21)

高卒の資格取ることは考えていないですね。基本的に資格重視なので。20、30（歳）とかになって、子どもも落ち着いてまた復活するって時に資格があると楽って聞いたんで。で、やっぱ女だからそうやって辞めるとか休まないといけない時期がぜったい来るのもわかってるんで、資格は通信とかで考えてま

す。(女性 18歳 派遣) (22)

向うはまだフリーターなので、考えても仕方ないっていうか、そんな感じですね。(女性 19歳 アルバイト) (23)

女性が性別役割分業モデルを生きようとすれば、男性が安定した収入を得られる仕事に就かなければ、家族を形成できない。そうした職に就くことが容易ではない高校中退者の、特に男性は、家族形成に向けて高いハードルに直面することになる。

中退後いったんはパートで働いたが現在は求職活動中の男性 (24) は、家族を形成するにあたっては、「結構な量を働かなきゃいけない」という意識を強く持っている。

結局歳とるにつれて結婚だったりも出てくれば、家庭持ったりとかすること考えたりも、将来的に考えると結構な量を働かなきゃいけないんで、それなりの仕事見つけるためには、それなりの資格だったり仕事だったり見つけなくちゃいけないんで。(男性 18歳) (24)

一方では、こうした経済的な面を意識して、異性とのつきあいから撤退する男性の語りもある。

あまり興味がないというか。だって、アルバイトして、彼女ができるとするじゃないですか。お金がかかるから、ぶっちゃけ面倒くさいじゃないですか。(男性 19歳 無職) (25)

以上をまとめると、次のようなことが言えるだろう。

性別役割分業に基づくジェンダー規範は、高校を中退した男性・女性の多くに内面化されている。また、結婚に向けた資金準備の必要性なども意識されている。これらを前提とすれば、妊娠などのほかに結婚を促進する要因がない場合、経済的な不安定さや余裕のなさから、特に男性において非婚の状態が継続される可能性が高いと考えられる。また、安定した収入を得られない一部の男性は、異性との関係そのものから撤退する可能性もある。

4 まとめ

今回の調査対象であった高校中退後概ね2～3年程度の期間を家族形成という視点からみると、妊娠を契機として実家の資源に依存しながら家族形成を始めるケース、できれば家族形成に進みたいが経済的な条件が整わず、妊娠など転換点もないまま家族形成を先延ばししているケース、家族形成に特に強い関心がないケースがあるといえる。家族形成に向かうに際しては、妊娠というきわめて偶発的な要素が大きな意味を持つと言えよう。

現在、第1子出生までの父母の結婚期間はともに6か月がピークとなっており(厚生労働省 平成22年度「出生に関する統計」)、結婚期間が妊娠期間より短い妊娠先行婚は現在の日本では一般的な形になりつつある。その比率は若年ほど高く、とりわけ、母親年齢が15～19歳では8割以上、20～24歳では6割以上が妊娠先行婚となっている。高校中退者を始めとする若者の中で、経済的に準備が整ってなくても、妊娠を契機に家族形成を始めていくケースがあることを踏まえて、教育、福祉、就労などの支援を考えていく必要がある。

家族形成段階にある今回の調査対象者の多くは実家の支援を受けていたが、そうした支援が得られなくなった場合は大きな困難に直面するであろうことや、若年層の有配偶離婚率の高さなどを踏

まえると、特に、妊娠し高校中退した女性への支援は極めて重要である。学業の継続や再開に向けた中退時からの情報提供や支援、住居や支え合える人間関係などの支援、資格取得支援や職業訓練など、教育機関と福祉機関、労働行政の連携が求められる。

中退した学校タイプ・家族背景と中退後の支援

首都大学東京都市教養学部助教 西村 貴之

Findings

いわゆる「進学校」を含む「大学・短大進学者の多い全日制・普通科高校」と「それ以外の高校」の中退者では、それぞれの家庭背景が高校進学に至るまでの違いを生んでいるとともに、中退の仕方やその後の進路の選び方などにおいても違いが見られ、中退後にも家庭の持つ資源などの違いが大きく影響している。

ただし、ここではあくまでも本面接調査を実施した 41 ケースから見えたものであり、サンプルの抽出方法等に調査実施上の制約があったことを念頭におく必要がある。

- 前者には、両親も相対的に高学歴者が多く、安定した家族関係にあると思われるふたり親世帯が多くを占める。それに対して、後者には母子世帯などのひとり親世帯の割合が少なくなく、相対的に経済的な面など不安定な家族背景にある者が多くを占めていることがうかがわれる。
- 前者の中退理由には、不登校やそれと関連した留年・休学などが多い。それに対して、後者には怠学的な欠席・欠時や喫煙・喧嘩などの素行（問題行動）が多く見受けられる。また後者では家庭の経済的厳しさが直接・間接に中退に結びついていると思われる者も一定割合存在していた。
- 現在の状況や将来の希望・見通しでは、前者は中退後ほとんどが就学の有無にかかわらず受験準備などの勉学に携わっており、そのうちの多くは大学を中心とした進学を目指している。後者は正社員やアルバイトなどで就労中の者たちが多くを占めている。中退後高校に戻ったり、高卒認定試験に合格して専門学校や大学に進学するなど勉学を続けている者たちも一定割合いるものの、そればかりではなく、就職の際に有利又は必要であると考え高卒資格を求める者が多く見受けられた。
- 求められる主な支援としては、前者にはフリースペース等の同世代の仲間と出会える居場所や、ほかの高校中退者の経験などを聞ける機会の提供が求められる。後者には主に高校再入学や高卒認定試験の情報提供、就職相談や職業あっせん等就労支援の充実、経済的支援などが求められる。

1 本章の課題

高校中退は、それぞれの学校タイプにより状況が異なることが、これまでに文部科学省などから公表されているデータや高校教師による教育実践記録などを通して推察される。例えば文部科学省が毎年行っている「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によれば、全日制よりも定時制で在籍者に占める中退率が高く、また全日制の中では普通科よりも専門学科や総合学科で中退率が高い傾向にある。また学校別の中退者数等が入手可能な都道府県のデータなどからは、例えば全日制普通科の中でも、いわゆる「進学校」では中退率がかなり低く、卒業者の進路で就職や一時的仕事・その他などが多いいわゆる「進路多様校」において高くなる傾向がうかがえる。さらに「進路多様校」・専門学科・定時制などにおいてはアルバイトや学校外での楽しみなどにより学業がおろそかになったり、あるいは問題行動などが原因と見られる中退が多いのに対し、「進学校」では抑鬱感などを伴う不登校が多くを占めていることなどが、高校現場では経験的によく知られていることである。

一方、両親の学歴や経済的安定度などの家庭背景が、子どもの進路等に大きく影響していることも

教育社会学などの諸調査がこれまでに明らかにしてきたところである¹。特に高校の場合、「進学校」といわれるようなタイプの学校ほど、両親の学歴等も高く、逆に「進路多様校」や定時制ではそれらが低くなる傾向にある。このようなことから、家庭背景と高校タイプ、そして中退の仕方やその後に関連があるのではないかと考えられる。

今回の面接調査で聞き取った内容を基に、ここでは以上のような連関について検討してみたい。

それぞれの高校を卒業者の進路分布なども加味して学校タイプに分けると以下のようなになる。

- ① 大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校（その高校のホームページ等で公表されている進路データに基づき、当該都道府県の高卒者全体の大学・短大進学率の平均よりもその率が高い全日制・普通科高校） 8名
- ② それ以外の高校 33名
高校の内訳は次のとおり
 - 1) 高等教育機関（専門学校を含む）進学者が多い全日制・普通科高校（その高校のホームページ等で公表されている進路データに基づき、当該都道府県の高卒者全体の専門学校を含む進学率平均よりもその率が高い高校で、①を除いた全日制・普通科高校）
 - 2) 高等教育機関（専門学校を含む）進学者がそれほど多くない全日制・普通科高校（①及び1)以外の全日制普通科高校）
 - 3) 全日制工業高校
 - 4) 全日制商業高校
 - 5) 全日制その他の専門学科高校（工業科・商業科以外の全日制専門学科高校及び総合学科高校）
 - 6) 昼間を主とする定時制普通科高校
 - 7) 夜間を主とする定時制普通科高校
 - 8) 定時制専門学科高校

全体のケースが41人と限られており、また調査技術上の制約もあって、これらが中退者全体の学校タイプ別分布を反映しているわけではない。しかし①の「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」を中退した協力者8名は、地域的にも一定分散していることなどから、このタイプの高校中退者を一定程度代表していると考えられる。その際、上記①の定義は、一般にいわれる「進学校」よりはやや広い範囲の高校を含んでいるが、「進学校」に近いものを代表していると考えてよかろう。したがって以下ここでは、①の「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」中退者と「それ以外の高校」中退者とを比較しながら、その特徴とそれぞれの課題などについて検討する。ただし41人中8人という①の割合は、中退者全体の分布からするとやや①タイプの比重が高い可能性もあり、あくまでここでの比較は①の中に見られる傾向と、それ以外の学校タイプに見られる傾向との比較にとどまるものである。

2 家庭的背景と学校タイプ

家族構成では、面接41ケース中、ふたり親世帯は31ケース、ひとり親世帯（全て母子世帯であった）は10ケース（24%）であった²。平成23年3月公表の調査票調査（回答者数1,176人）に占める母子世帯³は、21.1%であり、これは平成17年国勢調査（総務省統計局）に基づく15歳以上20歳未

¹ 橘木俊詔・八木匡『教育と格差』日本評論社、2009年など。

² 調査票調査において同居者として「祖父母」、「母親」及び「兄弟姉妹」を選択したケースは、本章で対象とする母子世帯10ケースで1ケース、ふたり親世帯で6ケースある。

³ 調査票調査において、同居者として「母親」のみ又は「母親」及び「兄弟姉妹」のみを選択した者を「母

満の子どもがいる親族世帯に占める母子世帯の割合の約 3.6 倍である⁴。

また、ふたり親世帯では離婚を経験していたり、事実婚の形態をとるケースもあり、ふたり親世帯においてもその養育環境は多様な状況がうかがわれる。

また両親の学歴構成は表 1 の通りであった。調査票調査全体では、「高校卒業」以下の学歴の保護者が半数を超える。「就業構造基本調査」（平成 19 年、総務省統計局）と比較すると、本調査票調査対象者の保護者世代とほぼ同世代の者（35 歳～49 歳）の最終卒業学校は、「高等教育」⁵（「専門」「短大・高専」「大学」「大学院」）学歴者、男性 50.9%、女性 51.2%、「高校卒業」以下（「高校」「小学・中学」）、男性 48.6%、女性 48.3%であり、単純な比較はできないものの本調査票調査のサンプルは、「高等教育」学歴者の割合がかなり低くなっていることがわかる⁶。一方、面接 41 ケースの両親の学歴をみると、父親（継父 3 名を除く）では、高等教育学歴（専門学校・高専・短大・大学）者が「高校卒業」以下の学歴者と同程度の割合を占めている。これは、前述のように面接調査の対象者が調査票調査の対象者全体と比較してやや「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」に偏っている影響を受けている可能性がある。

<表 1> 両親の学歴

	調査票調査		面接調査	
	父親 (n=1,174)	母親 (n=1,175)	父親 (n=28)	母親 (n=41)
高卒以下 (中学校卒業、高校中退を含む)	56.7% (n=666)	63.3% (n=744)	42.9% (n=12)	58.5% (n=24)
高等教育 (専門学校・高専・短大・大学)	20.5% (n=241)	26.4% (n=311)	50.0% (n=14)	34.2% (n=14)
不明（無回答を含む）	22.8% (n=267)	10.2% (n=120)	7.1% (n=2)	7.3% (n=3)

これら 41 ケースを、「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」と「それ以外の高校」とに分けてみると表 2 のようになる。前者では全員が両親揃っていたのに対し、後者では三割がひとり親世帯（全員母子世帯）であった。なお、面接調査時の家族構成でも、「それ以外の高校」では配偶者と一緒や一人暮らしなどの独立世帯が 15%いたのに対し、「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」では該当者がいなかった。両親の揃ったもとで暮らしているなどの点から見て、前者の方がより安定度の高い家庭のもとにいるものが多いといえる。

次に両親の学歴（継父などは除く）でも、「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」では両親とも大学・短大や専門学校など高等教育学歴者が多いのに対し、「それ以外の高校」では相対的に高卒学歴以下や学歴不明の者が多くなっている。

高校に関するこれまでの諸調査でも、「進学校」に近づくほど両親が高学歴であるなどの高階層家庭の割合が高くなっているが、同様の傾向がここにも認められる。このように、両親の学歴や家庭の

子世帯」としている。

⁴ 内閣府「若者の意識に関する調査（高等学校中途退学者の意識に関する調査）報告書（解説版）」p9

⁵ 本章では「高等教育」を大学院・大学・短大・高等専門学校に専門学校を含めて定義している。

⁶ 内閣府「若者の意識に関する調査（高等学校中途退学者の意識に関する調査）報告書（解説版）」p12

安定度などは、進学する高校のタイプに大きな影響を与えていることがわかる。

<表2>

		大学・短大進学者の多い全日制普通科高校		それ以外の高校**	
		実数	割合	実数	割合
家族構成	二人親	8	100.0%	23	69.7%
	一人親	-	-	10	30.3%
	(その他)*	-	-	5	15.2%
父学歴	高卒以下	3	37.5%	9	45.0%
	高等教育	5	62.5%	9	45.0%
	不明	-	-	2	10.0%
母学歴	高卒以下	3	37.5%	21	63.6%
	高等教育	5	62.5%	9	27.3%
	不明	-	-	3	9.1%

* (その他) は、「それ以外の高校」33 ケース中、同棲・結婚によって離家している者が5 ケースあったことを示す。

** 「それ以外の高校」の二人親の実数が23 であるのにもかかわらず父学歴の実数が20 であるのは、継父3 名を除いているからである。

3 中退の理由など

次に学校のタイプは中退の状況にどのような影響を与えているだろうか。中退理由についても両者の間に顕著な違いが目につく。面接調査を基に中退に影響を与えたと見られる事由を確認すると表3 のようになる。

「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」で目立つのが「学力（高校の勉強について行けない）」「高校での不登校（単なるサボりは除く）」と、「高校での休学」及び「高校での留年」である。休学又は留年を体験した者は8 人中5 人（休学と留年を合わせて経験した者が1 人）となる。なお、留年経験者4 人は全て不登校を合わせて経験しており、そのうちの少なくとも2 人からは抑うつ感など登校に際しての精神的困難を伴っていることがうかがえた。また「学力（高校の勉強について行けない）」についても、絶対的な学力不足で赤点がついて進級が危うくなるといった状況が多くみられる「それ以外の高校」のものとは異なる。不登校の結果授業が分からなくなったり、あるいは「勉強ができなくて辞めるって言ってたんですけど、辞めるって思うほどできてないわけじゃないって周りには思ってたみたいで…」との発言のように、自分が予期した水準の成績が取れないことを苦にするなどがこれに多く該当している。

他方、「それ以外の高校」に一定数見られた「家計（高校選択の制限）」、「家計（アルバイトの必要性）」や「素行（喫煙、喧嘩など）」も該当者はいなかった。

これに対し、「それ以外の高校」に多く見られたのは「生活習慣の乱れ（欠席・欠時）」であり、およそ3 分の2 の者が該当していた。遅刻が多くて欠時がかさんでしまったり、学校に行くふりをしてバイクで遊びに行ってしまうたり、あるいは夜のアルバイト後にそのまま遊びに行ってしまう朝起きられなかったなどが見受けられた。その結果、出席日数が不足し、「最初の通信簿もらって、それで留年が確定したって先生に言われて、留年したくないって言って。それで辞めようと思って」など、

進級が難しくなったことを中退のきっかけとしている者も少なくない。また「素行(喫煙、喧嘩など)」では、級友たちとの喧嘩がきっかけで学校に行きづらくなった(「別の不良高校の奴らとそいつらがつるんでいて…家に来るんですよ。で辞めちゃったんです。もう無理だと思って」)、同級生一人をみんなでひどくいじめてしまい、「全部やったことが学校側にばれて、一発で退学」などが挙げられていた。

<表3>

	大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校 (N=8)	それ以外の高校 (N=33)
	実数	実数
家計(高校選択の制限)	0	6
家計(アルバイトの必要性)	0	6
家族関係(親からの高校卒業への期待なし)	0	1
家族関係(居場所なし、独立願望)	0	1
学力(高校の勉強についていけない)	5	6
学力(高校選択の制限)	0	15
生活習慣の乱れ(欠席・欠課)	2	22
素行(喫煙、喧嘩など)	0	9
中退した学校での人間関係(教師との関係)	2	8
中退した学校での人間関係(友人との関係)	3	11
病気・けが	3	5
妊娠	0	3
高校での不登校(単なるサボりは除く。)	5	5
高校での休学	2	4
高校での留年	4	5
中退した学校とのミスマッチ(学校の雰囲気)	4	3
中退した学校とのミスマッチ(学習内容)	1	4

中退理由についても学校のタイプにより違いが見受けられ、「それ以外の高校」では、家庭の状況が高校中退に大きく影響していると考えられるケースも認められた。中退に大きく影響するものとして第一にあげられるのは、家庭の経済的状況である。

- ・**[1]** (女性) は、家庭の経済状況が厳しい。既に中学生のときから新聞配達のアパートを経験している。公立高校(定時制)に進学したが、「高校行ったら働けるんだから家に2万ずつ入れなさいってずっと言われてて、それで仕事探さなきゃってなって」、高1の6月からアルバイトを始めた。早いと朝7時から仕事が始まる。5~8時間働いたあと一度帰宅して仮眠を取れるときは取ってから17時に登校する。21時に授業が終わって帰宅をしても「もう遅い時間で、お風呂に入って、寝るって感じ」の毎日を送っていた。
- ・**[2]** (女性) は、「ちょっと兄弟が多いんで、それで家庭苦しくなっちゃうし」と中学時から定時制高校を志望していた。高校2年生のときに、「(家の購入や引っ越し等の支出が) ちょっと増えちゃったんで」「食費とか足りなくなっちゃうんで」と両親からアルバイトしてくれないかと「頼まれた」。「週にほとんどです」「朝6時とか」「夕方とかも入れて」高校に行く時間が取れない状態になり、「お父さんお母さんが、もう高校辞めてくれって言ったわけじゃない」が「結構生活状況を見ても、そうだったんで」と中退を決断した。

このように、家計が苦しく、本人のアルバイト収入が重要な収入源としてあてにされているような家庭では、時間的にも体力的にも学業との両立が厳しくなり、だんだんと学校を休みがちになり最終的に中退に至っている。欠時や欠席の重なりにより、勉強についていけなくなることも中退理由としてあがってはくるが、本人のアルバイト収入さえ不可欠とする家計状況も一つの規定要因となっているといえよう。

第二に、こうした家庭の経済状況に加え、両親や家族関係の不安定さが学校生活に影響して中退に結びついているケースもある。

- ・**[3]** (女性) は、兄と母親との三人で暮らしている。高校進学後、高1の1学期途中から学校を休むようになった。その背景には、両親の不和や別居という家族関係の大きな揺れがあった。「もし経済的に無理でも、やっぱ家のこととしてあげるだけでも違うだろうし」と母親を支えたいという思いから、7月から知人のもとでアルバイトをし始めた。ただ母親の思いは働くよりもまず高校を無事卒業してほしいということだったようで、半年ほどして高校に戻ると、「その時は母親は喜んでた」。

このように、家族関係の不安定さが学校生活に様々な影響を与え、中退に結びつくケースもある。家族関係の不安定さは、思春期の彼らにとっては、毎日の生活を揺るがすだけでなく、今まであてにしていた家族がどうなるか分からないという不安感や親などへの様々な思いを強く喚起させることで、心理面にも大きな動揺を与えることになる。こうしたことが時に学業の継続をも難しくさせるのではないか。

4 現在の状況など

次に面接調査時の状況についてである。ここでも学校タイプにより顕著な違いが見られる。表4のように、「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」では現在塾などに通って受験勉強中の者や大学に入学している者の割合が相対的に高い。このうち2人は高卒認定試験受験準備や大学受験をしながらアルバイト等の就労をしている。なお、不登校を伴った中退ではその後、医療機関などにかかっている者などが複数見受けられた。

これに対して「それ以外の高校」では正社員やアルバイトなど就労している者が約3分の2を占めているほか、育児にたずさわっている者も1割近くいる。一方、通信制高校に在籍したり、受験勉強

中の者が10人、さらに高校へ再度の入学を予定している者が4人いる。ただし、勉強中の10人のうち、その後大学や専門学校への進学を目指している者は半数以下にとどまっている。通信制高校在籍者でも卒業後などについては就労や学歴に関係のない資格取得を目指している者の方が多く、対照的な状況がうかがえる。ただし、いじめ被害などを体験して中退した者たちの中には、精神的困難を抱えて医療機関などにかかっていたり、ひきこもりやそれに近い状態にある者も、少数ではあるが見受けられた。

<表4>

	大学・短大進学者の多い全日制普通科高校 (N=8)		それ以外の高校 (N=33)	
	実数	割合	実数	割合
求職中	0	-	2	6.1%
受験勉強中	4	50.0%	1	3.0%
就学 (高校・全日制)	0	-	0	-
就学 (高校・定時制)	0	-	0	-
就学 (高校・通信制)	1	12.5%	9	27.3%
就学 (大学)	2	25.0%	1	3.0%
就学 (専門学校)	0	-	1	3.0%
就労 (正社員・契約社員)	0	-	4	12.1%
就労 (アルバイト)	1	12.5%	17	51.5%
就労 (家の商売・事業)	1	12.5%	1	3.0%
育児	0	-	3	9.1%
その他	1	12.5%	5	15.2%
特に何もしていない	0	-	2	6.1%

5 家族の対応

中退時や中退後のこうした状況に、家族はそれぞれどのように関わっているのだろうか。調査票調査では、高校を辞めることについての相談の有無について尋ねた項目について、対象者の77.9% (n=916) が「相談した」と回答している。その相談相手は、「親」が90.0%を占める。面接調査に応じてくれた対象者の大半も、中退するかどうかの決断を迫られたときに保護者と相談をしていた。既に本人の中で中退することを決めており事後報告というかたちで保護者に伝える者もいた。帰属していた場所を失い新たな生活を作っていかなければならない中退者にとって、家族に受容されることによって得られる情緒的な安定の意味は大きい。中退のことを相談したとき、保護者にどのように受け止められたのだろうか。今回の面接調査からは、対象者自身が自分の親に中退の事実を受け止めてもらったと感じており、中退に至る過程の中で葛藤を生じたが、その後回復するケースも含め親子関係が中退を機に悪くなったというケースはみられなかった。

(1) - 1 両親の受容

- ① 中退に至る本人の苦悩に寄り添っていくことでその決断を励ましていく

- ・**4** (女性) は、「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」の授業についていけなくなり、学校を休むようになり、高校2年の夏休みに中退した。その後、家族に励まされながら高卒認定資格を取得し、大学に進学した。
- ・**5** (女性) は、中学1年のときから先輩や同級生からいじめを受けてきており、その経験が後を引いてしんどい状態が続き欠席がちになる。欠課時数と学力面で卒業ができないと言われ、退学する。中退については母親に相談をしている。「学生じゃなくなっちゃったから無職というのはあれだと思ったので、親孝行として働いてお金渡そうかなみたいな。大学行けないくらいならバイトしちゃったほうがいいのか」とアルバイトを考えていたものの、中退後「人間恐怖心」に陥っている。自宅にずっとひきこもっている状態の彼女に対して母親は焦らずに唯一の理解者として支えている。

このようなかたちで受け止める両親のケースでは、「学力面での自信喪失」「病気」「いじめ」などの原因によって「不登校」「休学」「留年」を経て中退に至る本人に対して、そのプロセス、中退の決断、中退その後において、本人の苦悩を受容している。今回の面接調査では「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」中退者の両親に多くみられた。

② 最初は反対しながらも、本人の中退後の生活に見通しが立っているとわかり受け止めていく

- ・**6** (女性) は、「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」に入学後、授業に物足りなさを感じていた。数か月説得をした結果、両親は彼女のプランを受け入れた。休学を決め、高卒認定試験に合格し、自分と同じ学年の生徒が卒業するのと同時に退学し、大学生活を送っている。
- ・**7** (男性) は、素行を理由に留年が決まったとき「母親にも相談しましたね。最初は辞めないでそのまま学校残れって言ってましたけど、切り替えるために辞めて仕事するっていうことで。何回か揉めたんですけど、そうするって言ったんならそうしなさい、みたいな感じで」留年してでも高校を卒業してもらいたい母親と話し合いをした。夜間定時制に再度入学し、その後の進路を具体的にイメージしていた彼の決断を母親は受け入れた。

このケースには、自分の生き方を模索した結果、高校のカリキュラムに沿った教育を受けずに学外にて自ら学ぶことを選択した自律した「大学・短大進学者の多い公立全日制普通科高校」中退者の1ケースを除き、「生活習慣の乱れ(欠席・欠時)」や「素行(喫煙、喧嘩)」を理由に中退を余儀なくされた「それ以外の高校」に通うケースに多く見られた。

③ 本人の決断に対して強く反対することもなく受け入れる

このケースは、全てそれ以外の高校中退者の両親のケースである。(ア) 子どもが展望する夢を積極的に応援するケース、(イ) 本人の意向をそれほど考慮せず、子どもの中退後の移行を支えていこうとするケース、(ウ) 学業生活を励ますよりはむしろ家計を支えることを子どもに期待せざるをえないケースがみられた。

- (ア) **8** (女性) の両親は、大学進学費用に貯めてきた貯金を崩しながら、彼女が中退する前から取り組んでいた活動に対して中退後の生活を支援している。

(イ) 9 (女性) は、全日制・普通科高校を2学年末に休学する。次年度復学したが続かず、一学期で退学した。両親が、高等学校卒業程度認定試験合格後に「どっか(学校)行けって」言ったので、彼女は専門学校に進学をしている。

(ウ) 10 (女性) は、家庭の経済状況は厳しく、定時制高校に通いながらアルバイトをしていたが、両立が難しくなり、高校中退を考えはじめた。両親にそのことを相談した際、親に「辞めれば、そんなに行かないんだったら」と言われたことで、中退を決めたと語る。「仕事が大変なのは、親もそれは感じていたようです」と自分のことを見守ってくれていると彼女は感じている。

(1) - 2) 受容をめぐる問題

① 受容までの親子間葛藤

不登校など学校に行けない状況は、両親や周りからすぐに受けとめられるとは限らない。受容に至るまでに厳しい親子間葛藤を経験したケースは、「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」を中退する者のケースに多く見られる。高校卒業後の進路を大学進学と考えている者にとって、高校に通えないことの精神的な負担は大きい。それゆえに受容されることはとても大きな意味を持つが、不登校になった段階で何とか登校させたい両親と、どうしても学校に足を運ばせることができない本人との間でときに激しい衝突も含めお互いにしんどさを抱える経験をくぐってのち、ある時期を経て両親は学校に通いたくても通えず、中退を決断する本人の状況を受容するようになる。そのような葛藤を経験しないとしない者が少なくない。

- 11 (男性) は、中学3年の2学期半ば、「なんか糸がこうプツンって切れたように」急に不登校になった。その後ほとんど学校に登校できず、高校に進学したが、ほとんど行けない状況が続いた。高校1年のときに留年し、「不登校状態になった時は発狂寸前。毎日(親と)ケンカのような言い争いも絶えなかったし、今まで積み上げてきたものがすべて崩壊したような」。中退後、高等学校卒業程度認定試験に合格してから、「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」に再度入学したものの、高校2年の一学期後半に再び中退。「(2度目の退学時) 両親とも結構心配はしてくれました。一度免疫がついたって言ったらかわいけど、両親も前のようにわあわあ騒いでも仕方がないっていうのはわかっていて、話し合いはしましたけど、そう、わかったぐらいの。前みたいにケンカとかはなかったです。」

② 「中退者」という負のレッテル

両親や周囲にいる者が抱えている中退に対する負のイメージによって、中退をする者をすぐには受容できないために、中退者が自己肯定感をなかなか回復できないケースがみられた。中退することが進路変更の一方策ととらえられておらず、周囲からは未だ「失敗者」という負のレッテルを貼られている。

- 12 (女性) は、中退するときに母親に猛反対された。「母親が何でそんな気にするかも分かんないんです。今も隠してるんですよ、パートの仕事先の人にも隠してるみたいなんですよ。これは、高卒取んなきゃと思いますね。」彼女自身は中退した自分を肯定的に受け入れようとしているものの、中退の事実を周囲に隠している母親に対して申し訳なく感じている。
- 13 (男性) の両親は留年や中退について、本人の決断に任せるといった受容の態度を見せていた。しかし、中退後しばらく理解を示してくれていなかった親戚も最近励ましの言葉をかけてくれたこ

とで、「ようやく認めてもらった」と受容されたという感覚がもてたという。

(2) 中退後の対応一家庭の社会的・経済的支援

(1) で見てきたように、しかしその安心感を支えにしながら、中退者が新たな一步を踏み出す際には、保護者が実際に本人に提供できる具体的な支援の在り方が鍵になってくる。中退後の対応は、学校タイプによってその違いがみられ、「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」中退者に対する具体的な支援が手厚い家庭が多い一方で、「それ以外の高校」中退者の場合、家族が有する資源の乏しさもあってなかなか有効な支援ができない家庭が少なくない。

① 「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」中退者の家庭の支援の豊かさ

高校への再度の入学あるいは高等学校卒業程度認定試験を経て、高等教育機関に進学することを考える中退者の場合、予備校や進学後の学資の目処が立たなければ一步を踏み出せない。このタイプの高校中退者の家庭は、彼らが大学に入るまでに必要な予備校などの授業料や大学にかかる費用などは一切親が負担をしていた。また、大学受験の情報や医療機関の紹介、またひきこもらないよう外出に同行するなど経済的支援以外の支援も見受けられた。

- ・**14** (女性) は、サポート校の学費や進学した大学の学費などは両親が負担している。
- ・**15** (女性) は、「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」を「私の中では辞めたいくらい深刻なことだったので」と高校2年の夏休みに退学した。中退直後、「中退した人たちも通える予備校みたいなところ」や「ほかの予備校に行って」と、複数の場所で大学受験準備をしていた。「(予備校の費用は) たぶんかなり高かったと思います」。「みんなと違って基礎ができてないので、すごくこれだけでいけるのかという不安はあったんですけど、親とかあと兄弟とかが相談に乗ってくれて、どうにか勉強できました」
- ・**16** (男性) は、中退後の生活の中で精神的に不安定になり、一人で過ごす時間が多い彼に対して親が「会場まで連れて行って。そんなことを言いながら、僕が少しでも外に出歩くようにと気を遣ってくれたんだと思うんですけど」

② 「それ以外の高校」タイプの支援の乏しさ

「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」中退者と比べると、「それ以外の高校」中退者が家庭から得られる中退後の支援は乏しい。**16**のように中退後に高卒資格の必要性を感じたとしても、経済的な制約によって諦めるケースが少なくない。働いているため、より安定した職業に就くために必要な資格取得の時間も取れなかったり、通信制高校卒業後の進路の情報を、図書館のパソコンで入手していたりと、中退後の具体的な社会生活の送り方について、有益かつ正確な情報を入手できる環境にあるとは言い難い。

- ・**17** (女性) は、高卒の資格を取るために高校に再度入学したいが、「一応もし、また学校に入るとするにしても、やっぱりお金もないし」「親にも頼る訳にもいかないし。年齢の事もありますし、来年になるのかな？兄弟が専門学校に進みたいって話もあって、やっぱりあたしがそんな事言われるって感じじゃないしと思って」いる。また、高卒認定試験制度を詳しく教えてくれる他者(機関)に出会えていない。職業資格については「やっぱりそういうのに通っているうちは働けないし、でも働かないとそういうのに通うお金もないし」と働かないと生活できない状況の中で時間的・経済的に無理だと感じている。

- ・**18** (男性)は、卒業後の進路展望を「単位が取れたら、その後はパソコンを使うような、ビジネス系の専門学校に行こうかな。パソコン使えたら、将来的にも結構武器になる」と考えている。しかし、家族の状況を考えるとその費用を両親に頼れないでいる。奨学金制度や受験料が免除になる専門学校など経済的負担のかからない進学方法を探しているが、進路については、誰に相談せずにもっぱら「進路情報は、(自宅にないため)図書館のパソコンで、自分でもなんとかする」といった感触をもちながら生活を送っている。

6 必要とされる支援の在り方など

以上のように、「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」と「それ以外の高校」とでは、中退者の状況にかなり大きな違いが見られる。以上を概括すると次のようになる。

前者では、両親も相対的に高学歴者が多く、比較的安定した家族関係にあると思われるふたり親世帯が多くを占めている。他方、後者では母子家庭などのひとり親世帯の割合が少なくなく、両親の学歴も前者に比べて高学歴者が少ないことがうかがわれる。さらに中退に影響したと思われる事由では前者の多くに不登校やそれと関連した留年・休学などが多く見受けられるのに対し、後者では怠学的な欠席・欠時や喫煙・喧嘩などの素行(問題行動)が多く見受けられる。更に後者では、家庭の経済的厳しさが直接・間接に中退に結びついていると思われる者も一定割合存在していた。

また顕著な違いは、現在の状況や将来の希望・見通しなどにも見受けられた。前者では中退後ほとんどが就学の有無にかかわらず受験準備などの勉学に携わっており、大多数が大学を中心とした進学を目指している。他方後者では、正社員やアルバイトなどで就労中の者たちが多くを占めている。中退後高校に戻ったり、高卒認定試験に合格して専門学校や大学に進学するなど勉学を続けている者たちも一定割合いるものの、就職の際に有利又は必要であると考えたために高卒資格を求める者が多く見受けられる点は前者と異なる点である。

これらからは、冒頭に示したような、一人ひとりの家庭的背景が進学する高校のタイプに大きな影響を与えているとともに、そうした家庭背景と進学したタイプによる学校教育の違いとが輻輳しながら中退のされ方にも違いをもたらしているということが、改めて確認されたといえる。そしてこれらの違いは、中退後の本人の進路展望とともにそれぞれの家庭が提供できる支援資源の違いに影響を及ぼしている。

こうした違いは、中退者が支援として何を求めるかという点にも反映している。前者ではフリースペース等の同世代の仲間と出会える居場所や、ほかの高校中退者の経験などを聞ける機会を求める意見があった。前者のタイプの高校では元々中退率が低く、身近に中退した友人などがいないことや、中退前に不登校を経験して友人関係で孤立しがちであったことなどが反映されていると思われる。フリースペース等は、最近全国各地に広がっているものの、地域によっては不足していたり、認知されていない状況もあるかもしれない。また精神的困難を抱え専門機関等を利用している者も見られたことから、こうした支援の必要性もあげられるだろう。高校に再度入学することができず、塾や予備校などを利用して高卒認定試験受験や大学受験準備をしている者も少なくなかった。これらについては適当なところがすぐに見つからず苦労した者もいたのではないと思われる。とはいえ専門機関や学習機関については、適切な情報提供がされれば、家族などの支援も得て、何とか解決している者が少なくないように見える。

後者では、再び学び直したくなったときに高校への再度入学や高卒認定試験の受験方法について、知らせてほしいというような意見があったほか、就職について相談にのってくれたり仕事を紹介してくれるところがほしい、職場実習の機会がほしい、賃金や労働条件についてきちんと管理してほしい

など、働くことに関わる意見が多く聞かれた。これらについては既存の制度・施策がある程度カバーしているとはいえ、若年者には利用しづらかったりよく知られていないことも多い。また、経済的困難を抱えた者たちへの経済的支援も必要と考えられる。相対的少数とはいえ、このなかにもさまざまな精神的困難を抱えて不活発状態になっている者たちがいる。専門家を含む支援を無償や低廉に提供できる公的仕組みが必要であろう。さらに後者にも一定割合存在している学び直しを必要としている者たちへの学習支援についても、更なる充実が求められるだろう。

調查項目一覽

・現在の状況

・家族関係

調査票調査の回答に沿って家族構成の確認

高校中退及び中退後、現在までの状況に係る両親との関わり方など

・高校中退及び中退後の経過

中退前～中退直後

中退に至る経過、中退時の展望、中退直後の状況

中退～現在

中退後の進路過程

・将来展望

将来見通し

自分の将来への不安

高卒資格について必要性

取得したい職業資格

社会サービス・必要な支援

・ネットワーク

保護者以外に親しく話ができる大人

親しい友人

・自己評価・意識

・その他

中退について

社会への要望

高校生や中退者へのアドバイス

企画分析会議委員名簿

【企画分析会議委員（委員は五十音順）】

座長	放送大学教養学部教授	宮 本 みち子
委員	首都大学東京都市教養学部教授	乾 彰 夫
	埼玉県立浦和西高等学校長	管 野 吉 雄
	東京聖栄大学健康栄養学部教授	長 須 正 明
	法政大学社会学部准教授	樋 口 明 彦
	北海道大学大学院教育学研究院教授	宮 崎 隆 志
	神奈川県立田奈高等学校教諭	吉 田 美 穂

【オブザーバー】

	首都大学東京都市教養学部助教	西 村 貴 之
	文部科学省初等中等教育局児童生徒課課長補佐	武 井 久 幸
	国立教育政策研究所生徒指導研究センター総括研究官	城 戸 茂
	同	藤 田 晃 之
	同	藤 平 敦

【事務局】

	内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室	
	室長	伊奈川 秀 和
	参事官（青少年支援担当）	梅 澤 敦
	参事官補佐（青少年支援担当）	鈴 木 和 則
	主査（青少年支援担当）	荒 巻 由 衣

※ 所属及び役職名は、平成24年3月時点のものである。